

8/8 説

目標励みに日々生きる

雨上がりのグラウンドに笑顔があふれた。今年5月18日、がん患者と家族のためのイベント「リレー・フォー・ライフ」。「歩くりレー」を24時間続け、寄付を呼びかける。各地で催されてきたこのイベントが、初めて大分県中津市で開かれた。

進行した大腸がんを患う西原ケイ子さん(86)は、誰よりも楽しみにしていた。4月に中津市民病院の緩和ケアセンターに入ってから、イベントへの参加を目標に、体調を整えながら日々を生きてきた。

激しい風雨に見舞われた午前中、手助けできる家族のない西原さんは、行けるかどうか心配していた。午後、雨がやむと、がん治療の主治医である外科部長の永田茂行さんがひよこり現れた。

「先生は私のお助けマン。顔をみるだけで安心する」。

西原さんは笑顔になった。永田さんの押す車いすで会場入りすると、テントでリレーを見守り、手作りの赤飯を振る舞った。「目標達成」を祝う感謝の気持ち。「みんなが楽しんでくれて、それが一番」。西原さんは

満足そうだった。全12床のセンターは4月にオープンした「緩和ケア病棟」だ。主にがん対策の一環として国が推進し、全国に急増した。日本ホスピス緩和ケア協会によると、2019年6月15日時点で計424病院にあり、10年

緩和ケア 生命を脅かす病の患者とその家族に対し、体の苦痛だけでなく、精神的な不安、お金や介護負担など社会的な心配事、人生の意味や死と向き合う苦しみ(スピリチュアルペイン=魂の苦しみ)を和らげる。病気の進行度にかかわらず、困っている患者や家族が対象となる。



リレーフォーライフ中津に参加した西原さん(中央)、がん治療の主治医・永田茂行さん(左)やセンター長の武末さんらに手作りの赤飯を振る舞った(武末さん提供)(5月18日)

前の2倍を超えた。一般病棟が治療の場とすれば、緩和ケア病棟は、がんや難病などを抱える患者や家族の苦痛を和らげる場。いわゆるホスピスのような「終のすみか」のイメージが強いが、最近では、在宅療養に移るための準備の場という位置づけが色濃くなった。国が在宅でのみとりを推しているためだ。

「緩和ケア病棟は増えましたが、その役割はまだ手探りのところも多いのではないのでしょうか。うちがまさにそうです」。センター長の武末文男さんは率直に語った。昨夏にこの病院に来る前は厚生労働官僚。医師免許を持つ医系技官として政策を立案し、医療のしくみを作る立場だった。

センター長として最初の患者の一人が西原さんだ。西原さんと、その最期の日々に寄り添った病院関係者の姿から、地方の緩和ケア病棟が直面する現実が見えてきた。

(このシリーズは全6回)